路地空間における領域化と住居開放性

経年変化にともなう生活領域の変化に関する研究 その4

TERRITORIALITY AND OPENNESS OF HOUSING SPACE IN ALLEY-SPACE

A study on long-term changes of territoriality Part 4

藤谷 英孝*, 小林 秀樹**

Hidetaka FUJITANI and Hideki KOBAYASHI

This paper is intended as an investigation of the changes of openness of housing space and territoriality in the existing residential area. The boundary between inside and outside of housing space is surveyed in particular. The results are summarized as follows ; (1) The self-expression elements in alley-space tend to be the most in the case of sliding door and window toward alley and in the main traffic line.(2) On the other hand the extensions of commodity tend to be the most in the case of hinged door and no window and in the sub traffic line. (3)The residents moving recently evaluate affirmatively about openness of housing space.

Keywords : *Territoriality, Alley, Openness of housing space, Self-expression, Extension of commodity*

生活領域, 路地, 住居開放性, 表出, あふれ出し

1. 研究の背景と目的

これまで、都市型低層集合住宅と高層集合住宅を調査対象として、生活領域の経年変化について明らかにした^{①)}。しかしながら、これらの研究は、集合住宅という集住形式・建築形態を対象としたものであり、伝統的な住居集合を含む多様な住居形態における生活領域についての分析はなされていない。そこで、本稿では伝統的な住居で構成された既成住宅地を対象として、近年、様々な建物に更新された住居集合の経年変化と生活領域を考察する^{②)}。

既成住宅地の路地において、住民が自分たちの領域としていればいるほど、結果として、玄関や窓は開放されて植木鉢などの表出が多くなり、他人を排除する働きをもつとされている。つまり、路地に住居が開放されて生活の一部が戸外にあふれ出すことで、路地が共有領域になりやすいことが指摘されている^{③)}。

また、東京都台東区谷中の調査では、伝統的な住居を含めた様々な住居形態と生活領域の対応関係について、住居の更新過程、塀の問題を通して明らかにされている。その結果、住居前の道に対する領有意識の形成には、塀の有無、視線交流の有無と密接に関わることが確認されており、最近の建替え事例では、玄関側に対する視線交流の少ない住居形態が増えることにより、道に対する領有意識が著しく減退しつつあることが示されている^{④) ⑤) ⑥) ⑦)}。

このような路地の領域性に関する既往研究としては、路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証^{⑧) ⑨)}がある。この研究では、住宅に密着した通路空間である路地での利用実態を通じて、外部空間に関する計画概念の明確化がなされている。また、密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究^{⑩)}では、密集住宅の建物の更新や建替えなどによって生まれる住戸と住戸の隙間の役割について明らかにされている。

京都東山における路地の空間特性と安心感からみたセキュリティ空間としての可能性^{⑪)}では、防犯だけでなく災害なども含めて安心感が検証されており、実際に犯罪被害にあいにくい路地空間を捉えて、路地の空間特性とセキュリティの関係性が示唆されている。しかしながら、これらの既往研究では路地の空間特性や利用実態の分析が中心であり、路地における住居開放性の経年変化と生活領域を考察したものは、著者の知る限りでは存在しない。

そこで、過去の調査における路地空間と個々の住居が更新されている現在の路地空間を比較することにより、経年変化を把握したうえで、路地に面する住居における玄関形式・窓の開放性、路地空間における居住者の働きかけである表出・あふれだしの現状を捉える。加えて、路地空間と居住者意識の対応関係を分析することで、住居開放性と生活領域を考察することを目的とする。

* 千葉大学大学院工学研究科 非常勤講師・博士(工学)

** 千葉大学大学院工学研究科 教授・工博

Part-time Lect., Graduate School of Engineering, Chiba Univ., Dr.Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Chiba Univ., Dr.Eng.

2. 調査概要

2-1 調査対象

本研究では、路地空間に表出・あふれ出しが多くみられ、路地に面する建物の改修、建替えがおこなわれて、玄関形式・窓の異なる住居が立地する東京都中央区月島地区を対象とする。月島地区は、1890 年代に埋め立てられた地区で、第二次世界大戦の戦火を免れたため、現在でも戦前の路地が多く残っている。また、碁盤目の道路が築かれており、「清澄通り」36m、「表通り」11m、「通り」6m、「路地」3～4mと明快な段階構成をなしている。

近年、西仲通り商店街では、地区住民のための生活物資の販売店からもんじゃ屋の飲食店に変わり、「清澄通り」西側地区の観光地化が進んでいる。また、月島駅の開設にともなう駅前再開発によって超高層集合住宅の建設がなされている(図 1)。

2-2 調査方法

調査地区の通り抜けができる路地を対象として、現地踏査をおこなって、路地空間の表出・あふれ出し、建物の玄関形式・窓などの住居開放性を把握する(表 1)。また、月島地区の中でも住宅用途が多く、路地に面する建物の更新がなされた「清澄通り」東側地区を選定して、居住者へのアンケート調査を実施する(表 2)。なお、アンケート内容としては、道路利用、集団の凝集性、安心感、住居の開放性などで、居住者の生活領域を捉える^{注3)}。

表 1 現地踏査概要

対象地区	調査時期	戸数	備考
月島全地区	2015 年 5 月	890 戸	通り抜けができる直線の路地

表 2 アンケート調査概要

対象地区	調査時期	配布数	回収数	回収率
月島東側地区	2015 年 10・11 月	201 戸	132 戸	65.6%

図 1 調査対象地区

3. 建物立面と表出・あふれ出し

3-1 建物立面と表出の経年変化

路地に面する建物立面について、1974 年調査^{注4)}における路地の立面をみると、長屋では木製引き戸と縦格子窓で構成されている。それから約 40 年後の 2015 年では、既存住居の集合住宅への建替えや、2 階建から 3 階建への住居改変がみられる。また、建物立面について、木製引き戸からアルミ製開き戸、縦格子窓から小さな出窓へ変わり、路地空間での植木鉢などの表出が減少している(図 2)。

このような経年変化がみられる建物立面を、玄関形式の引き戸・開き戸と窓の有無により分類すると (1)「引き戸+窓-有」、(2)「引き戸+窓-無」、(3)「開き戸+窓-有」、(4)「開き戸+窓-無」の 4 タイプに大別することができる(図 3)。

3-2 建物立面と表出

玄関形式が「引き戸」「開き戸」以外に、路地に面する玄関がない住居、シャッターなどの玄関を「その他」として、それぞれの玄関形式と窓の有無を整理したものが表 3 となる。この玄関形式・窓の建物立面分類と路地に面する住居玄関前の表出との関係を見ると、「引き戸+窓-有」「開き戸+窓-有」「引き戸+窓-無」「開き戸+窓-無」の順で、表出が少なくなる。このため、いずれの玄関形式においても窓がある住戸で表出が多い結果となり、開き戸より引き戸において表出が多くなる傾向にある。

図 2 路地の立面の経年変化

図 3 路地に面する建物立面分類

建物用途と表出について、同じ住宅用途でも個人住宅では表出が多くみられるが、集合住宅では少ない結果となる。また、事務所・飲食店・店舗などの非住宅では、約半数に表出がみられる(図4)。なお、各建物の植木鉢などの数量を示す表出量について、個人住宅、非住宅では「10～」が多く、表出量が多いことがわかる(図5)。

路地に面する建物の玄関、主要な出入口をメイン動線、個人住宅の勝手口、非住宅の裏口などをサブ動線として、そのアクセス種別と表出との関係を示したものが図6となる。これをみると、メイン動線の方がサブ動線より、表出が多いことが把握できる。

このことから、路地に対して玄関形式・窓が大きい開放性が高い建物においては、表出がなされて、特に個人住宅では植木鉢の表出量も多くなる傾向にある。加えて、建物の主なアクセスとして利用される場合にも表出がなされることが確認できる。

3-3 建物立面とあふれ出し

建物立面分類と玄関前のあふれ出しとの関係を見ると、「引き戸+窓-有」ではあふれ出しが少ないのに対して、「開き戸+窓-無」では多く、表出とは逆の結果となる。このことは、路地に面する玄関・窓が閉鎖的になると、建物内から外への視線が少なくなって、あふれ出しが多くなると考えられる(表4)。

建物用途とあふれ出しについて、個人住宅と集合住宅の住宅用途よりも非住宅であふれ出しが多い傾向にある(図7)。また、各建物の数量を表すあふれ出し量について、住宅用途では「1～4」非住宅では「10～」が多い結果となる(図8)。

表3 玄関形式・窓と表出

	引き戸		開き戸		その他		総計
	窓-無	窓-有	窓-無	窓-有	窓-無	窓-有	
調査数	51	364	43	293	41	98	890
表出-有	47.1%	80.8%	23.3%	66.9%	22.0%	52.0%	65.6%

※表出-有：玄関形式・窓分類の住居数に対する表出がある住居数の割合

図4 建物用途と表出

図5 建物用途と表出量

図6 メイン・サブ動線と表出

あふれ出し種類については、住宅用途では「自転車」が目立ち、特に、個人住宅では「ゴミ箱」、「物置」などが路地空間にあふれ出している。一方、非住宅では「ゴミ箱」、「酒類のダース箱」などが多くみられる。これは、表通りをメイン動線とする飲食店においてサブ動線の路地にあふれ出しが多いことによる。

あふれ出しとメイン動線とサブ動線のアクセス種別との関係については、サブ動線において、あふれ出しが多い結果となる(図9)。このことは、表出とアクセス種別との関係とは対照的な結果になり、表出はメイン動線の場合に多くなるのに対して、あふれ出しはサブ動線として利用される場合に多いことがわかる。

3-4 建物立面と表出・あふれ出しの関係性

過去の建物立面について、木製引き戸と縦格子窓の「引き戸+窓-有」が多く、玄関前に植木鉢などの表出がみられた。それに対して、現在の建物立面では開き戸や、窓-無が多くなり、表出が少なくなる傾向にある。すなわち、これまでの開放性の高い長屋から閉鎖的な住居に経年変化して、建物内部と外部との関係性が弱まっており、表出も少なくなっていることが確認できる。

以上のことから、建築計画による玄関形式、窓の有無、建物へのアクセスの相違により、居住後の住民による外部環境への働きかけ、人と環境の相互浸透が異なることがわかる。そのため、人が環境に対して受動的になるだけでなく、路地空間での表出・あふれ出しのように、人が能動的に自らの環境形成に参加するような空間計画に留意することが必要である。

表4 玄関形式・窓とあふれ出し

	引き戸		開き戸		その他		総計
	窓-無	窓-有	窓-無	窓-有	窓-無	窓-有	
調査数	51	364	43	293	41	98	890
あふれ出し-有	58.8%	48.4%	69.8%	64.2%	61.0%	55.1%	56.5%

※あふれ出し-有：表出-有と同様に分類別のあふれ出しがある住居数の割合

図7 建物用途とあふれ出し

図8 建物用途とあふれ出し量

図9 メイン・サブ動線とあふれ出し

4. 路地における生活領域

ここでは、通り抜けができる路地に面する住居の居住者を対象としたアンケート調査^(注5) から、道路利用、集団の凝集性、安心感、表出・住居の開放性に対する意識などを把握する。

4-1 居住者属性

居住者の世帯主年齢について、60代と70代の構成比が高く、合計すると過半数になり、また、80代以上も約2割であることから高齢者世帯が多いことがわかる(表5)。また、世帯人員について、2人世帯、1人の単身世帯が多く、世帯人員が多くなるほど構成比が低くなる傾向がみられる(表6)。さらに、家族構成をみると、「単身世帯」が最多で、「40才以上の夫婦のみ世帯」、「1人親と子世帯」「40才以上の夫婦と18才以上の子世帯」が続いている(表7)。

持家・借家ごとに入居時期を整理すると、総計で1940年代が最多の2割程度を占め、2000年代、2010年代の最近の転入者も多いことが把握できる。また、持家・借家別の特徴としては、1940年代からの居住者では持家が多いのに対して、2000年以降の居住者では借家が多いことが確認できる(表8)。

4-2 道路(表通り・通り・路地)の利用

住居の玄関が面する道路(表通り・通り・路地)の利用頻度について、「日に何回も」が半数以上を占めており、次いで「日に1回程度」が多くなる(表9)。また、行為内容をみると「戸外の掃除」「植木草花の手入れ」が多く、「立ち話」が続いている。一方、「小さい子供の遊び」「日なたぼっこ」「軽い運動」は少ない(表10)。

表5 調査対象者の世帯主年齢

20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	総計
1	5	12	14	31	36	21	2	122
0.8%	4.1%	9.8%	11.5%	25.4%	29.5%	17.2%	1.6%	100.0

表6 調査対象者の世帯人員

1人	2人	3人	4人	5人	6人	総計
45	46	22	7	3	1	124
36.3%	37.1%	17.7%	5.6%	2.4%	0.8%	100.0%

表7 調査対象者の家族構成

単身者	Co+0～5才	Co+夫婦のみ	Co-0～5才	Co-6～11才	Co-12～17
45	1	2	1	2	3
36.6%	0.8%	1.6%	0.8%	1.6%	2.4%
Co-18才以	Co-夫婦のみ	3世代	1人親と子	その他	総計
15	27	4	16	7	123
12.2%	22.0%	3.3%	13.0%	5.7%	100.0%

※Co+ (40才未満)、Co- (40才以上)は世帯主年齢、「0～5才」等の年齢は末子年齢を表している。

表8 調査対象者の持家・借家別入居時期

	持家	借家	総計
1900年代	2 (2.3%)	1 (3.7%)	3 (2.6%)
1910年代	2 (2.3%)	0 (0.0%)	2 (1.7%)
1920年代	6 (6.8%)	1 (3.7%)	7 (6.1%)
1930年代	7 (8.0%)	2 (7.4%)	9 (7.8%)
1940年代	22 (25.0%)	3 (11.1%)	25 (21.7%)
1950年代	10 (11.4%)	1 (3.7%)	11 (9.6%)
1960年代	8 (9.1%)	2 (7.4%)	10 (8.7%)
1970年代	6 (6.8%)	2 (7.4%)	8 (7.0%)
1980年代	6 (6.8%)	2 (7.4%)	8 (7.0%)
1990年代	4 (4.5%)	0 (0.0%)	4 (3.5%)
2000年代	12 (13.6%)	4 (14.8%)	16 (13.9%)
2010年代	3 (3.4%)	9 (33.3%)	12 (10.4%)
総計	88 (100.0%)	27 (100.0%)	115 (100.0%)

このことから、現在でも玄関前の道路は、居住者によって利用されており、植木草花の手入れ、掃除などの維持管理、立ち話などの近隣交流の場として機能していると捉えられる。

道路での行為内容として多い「戸外の掃除」「植木草花の手入れ」「立ち話」について、入居年度別に整理すると表11になる。これをみると、「1900～1940年代」「1950～1990年代」の居住年数が長い居住者と比較して、「2000年代～」最近の入居者では、どの行為内容も利用が少ないことが確認できる^(注6)。

これより、長期間住んでいる居住者では玄関前道路の維持管理、近隣交際の場として利用がなされて、伝統的な住居と路地での生活が継続されているのに対して、最近の転入者では、これまでの道路利用や、共同性が保たれていないことが把握できる。

4-3 表出

居住者が見知らぬ人に対して「大変気になる」と感じる排他感と表出との関係を見ると、表出「有り」の方が「無し」よりも排他感が強いことが確認できる(表12)。つまり、表出がある住戸では、見知らぬ通行人に対して、排他性が強い居住者が多くなる。このため、表出が家の窓から適度に遠ざける働きを持つと推測される^(注7)。

表出と路地での近隣交際について、表出「有り」では、9割近くが「半数」以上を知っていると回答しているのに対して、「無し」では、約7割にとどまる(図10)。すなわち、玄関前に表出がある場合には、路地内での近隣関係が築かれているのに対して、表出が無い場合には、近隣交際が築かれにくい傾向にある^(注8)。

表9 道路の利用頻度

日に何回も	日に1回程度	週に1、2回	めったにない	総計
122	46	19	27	214
57.0%	21.5%	8.9%	12.6%	100.0%

表10 道路での行為

	立ち話	小さい子供の遊び	夕涼み	軽い運動	植木草花の手入れ	戸外の掃除	日なたぼっこ
有効回答数	114	97	103	102	117	122	108
点数	1.26	0.36	1.06	0.53	1.63	1.74	0.50

※利用頻度：ほぼ毎日～3点、週3～4回程度～2点、週1回程度～1点とした平均

表11 道路での行為と入居年度

	1900～1940年代	1950～1990年代	2000年代～	総計
有効回答数	41	37	26	104
掃除	1.77	1.95	1.26	1.71
植木草花の手入れ	1.88	1.65	0.92	1.56
立ち話	1.31	1.50	0.68	1.23

表12 表出と排他感

	無し	有り	総計
有効回答数	29	97	126
排他感	44.8%	55.7%	53.2%

※排他感：「大変気になる」と回答した割合

図10 表出と近隣交際

これらの結果は、既往研究でも指摘されているように表出の役割として、見知らぬ通行人に対する排他性や、近隣交際の契機となる融和性を有していると捉えられる。

次に、路地単位での表出がある住居数と路地利用の関係^{注9)}について、表出が多くなると「戸外の掃除」「植木草花の手入れ」も多くなる傾向にあり、表出と路地での行為が正の相関にある(図11・12)。このことは、路地単位においても表出があることで、居住者の利用がなされて、住居近傍の領域化が進んでいることを表している。

現在、月島地区での犯罪発生認知件数は、他の地区と比べて低い結果である^{注10)}。これは、表出があることで住民の外部利用が促進されて、自然監視性が高まり、同時に見知らぬ人への声掛けの機会が増えることで、犯罪率が低くなると考えられる。

表出と入居年度について、「1900～1940年代」「1950～1990年代」と比べて、「2000年代」の最近の転入者では、表出「無し」が多くなる傾向にある(図13)。また、表出意識と入居年度について、入居年数が短くなるとともに、「好ましい」の肯定的な意見が少なくなり、「置くべきでない」の否定的な意見が多くなる(図14)。

以上のことから、近年の入居者では玄関前に植木鉢などの表出を置くことが少なくなり、外部利用も減少する傾向にある。そのうえ、表出に対する意識も否定的な意見に変化している。つまり、居住者自らの住居外部への働きかけである表出がない場合には、表出に対する意識も低下していることが把握できる。

図13 表出と入居年度

図14 表出意識と入居年度

図11 表出と戸外の掃除

図12 表出と植木草花の手入れ

4-4 集団の凝集性

近隣交際と入居年度の関係について、「1900～1940年代」「1950～1990年代」では「だいたい知っている」が半数を占め、「全員」が続いている。一方、「2000年代～」では「2～3軒」が最多となり、近隣交際が発達していない(図15)。このことは、居住年数が少ないことで、交際機会が少ないことや、賃貸住宅の入居者が多いことが原因であると考えられるものの、近隣交際の契機となる表出が少ないことも、要因であると考えられる。

近隣交際意識と入居年度の関係についても、「1900～1940年代」「1950～1990年代」では、「必要である」が6割以上を占めているのに対して、「2000年代～」では4割以下の低い結果となる(図16)。これより、最近の入居者では、路地における近所つきあいが少ないうえに、その必要性も感じていないことが確認できる。

このように、特に近年では、近隣交際が希薄になりつつあるが、近隣との関係性は、地域における犯罪対策、災害時における消火・救援活動、生活支援を担ってきた。そして、このような近隣関係は日常から育てる必要がある。そのため、入居年数が少ない居住者においても、関係が築きやすい住環境形成が求められる^{注11)}。

それには、路地単位での表出と近隣交際の関係である図17が示すように、植木鉢などの表出があることで、居住者の戸外利用が進み、それにより、近隣交際の機会が増えて、地域とのつながりが増すような外部空間を計画することが解決策の一つになる。

図15 近隣交際と入居年度

図16 近隣交際意識と入居年度

図17 表出と近隣交際

※表出率：路地の全住居数に対する表出のある住居の割合
 ※近隣交際：全員知っている-4点、だいたい知っている-3点、半数くらい-2点、2～3軒くらい-1点とした平均

4-5 安心感

路地に面する住居の玄関開放に関する安心感について、総計で29.5%となり、これまで調査した都市型低層集合住宅、高層集合住宅の結果^{※1 2)}のなかでも低い結果となる。このことは、今回の調査では、袋小路ではなく、通り抜けができる路地のみを対象としていたことから、安心感が低くなったものと考えられる。

月島地区は「表通り」「通り」「路地」の段階的な道路構成であることから、道路種別の安心感をみると、「路地」の安心感は、「通り」「表通り」よりも高いことが確認できる(表13)。このことは、住居集合における私的スペースとしての路地は、居住者の安心感形成にも有効であると捉えられる。

また、安心感と玄関形式の関係をみると、「開き戸」よりも路地に面して大きく開くことができる「引き戸」において、安心感が高い傾向がみられる(表14)。これは、住居内から路地への監視が容易で、視線による領域化がしやすいためであると推測される。

近年の入居者では借家の割合が多かったことから、所有形態と安心感の関係をみると、借家よりも持家の安心感が高くなる(表15)。ただし、入居年度と安心感の関係では、「1950～1990年代」が最も低い結果になる。つまり、道路の利用、表出、近隣交際が多い入居年度でも、安心感が形成されていないことを表している(表16)。

自由回答欄における安心感に関する事項をみると、空き家の増加、周辺でのマンションの増加、社会的な犯罪数増加による不安感の

増大などの意見がみられる(表17)。特に1900年代から住んでいる高齢者においては、「子供の頃、玄関は開けはなしであったが、最近では物騒な世の中なので玄関を閉じるようになった」との回答がある。これより、社会情勢や治安悪化による漠然とした全般的犯罪不安が住居開放の安心感に大きく影響していると捉えられる。

4-6 住居の開放性

路地に面する住居の窓と入居年度の関係について、「2000年代～」では、窓の無い住居が多く(図18)、かつ、住居の玄関形式についても、「2000年代～」では「引き戸」よりも「開き戸」の事例が多くなる(図19)。そのため、近年、玄関形式・窓の有無について、住居の閉鎖化が進んでいることが把握できる。

開放性意識と入居年度の関係について、「2000年代～」では、「開放的でよい」、「外の様子がわかってよい」の肯定的な評価が多いのに対して、「家の中が見られるので気になる」の否定的な評価は少ない結果となる。すなわち、最近の転入者では路地に対して開放性の高い住居について、肯定的な評価が多いことがわかる(表18)。

これより、現在、路地における住居の閉鎖化が進行しているものの、最近の転入者では、住居の開放性が肯定的に評価されている。加えて、現地踏査から路地に対して開放性が高い住居では、居住者による表出が多いことが確認できた。このため、住居内と外を連続させることで、視線による領域化にとどまらず、外部利用によって生活領域を拡げることにも可能となる。

表 13 安心感と道路種別				
	表通り	通り	路地	総計
有効回答数	9	11	109	129
安心感	22.2%	18.2%	31.2%	29.5%

※安心感：玄関開放にともない「別に不安はない」と回答した住居の割合

表 14 安心感と玄関形式				
	引き戸	開き戸	その他	総計
有効回答数	62	52	15	129
安心感	32.3%	26.9%	26.7%	29.5%

表 15 安心感と所有形態			
	持家	借家	総計
有効回答数	95	29	124
安心感	33.7%	20.7%	30.6%

表 16 安心感と入居年度				
	1900～1940年	1950～1990年	2000年代～	総計
有効回答数	45	41	28	114
安心感	33.3%	26.8%	32.1%	30.7%

表 17 アンケート調査 自由回答抜粋	
入居年度	安心感に関する事項
1900年代	子供の頃、玄関を開けはなしであったが、物騒な世の中になり、閉めている。
1920年代	周辺にマンションが建ち始めて、隣近所に誰が住んでいるか分からない。
1920年代	駅に通じる路地なので、見知らぬ人が多く通るようになってしまった。
1940年代	以前は住人しか使わなかった路地を、通行利用する人が多くて不安になる。
1980年代	最近、世間でのニュースを見て、娘がいるので、鍵をかけるようになった。
1980年代	近所に空き家があるので、不安に感じる。

表 18 開放性意識と入居年度								
	開放的でよい	様子がわかる	子供の監視	話できる	気になる	別にない	その他	総計
有効回答数	59	50	12	20	32	28	1	109
1900～1940年代	57.1%	42.9%	11.9%	28.6%	31.0%	33.3%	0.0%	42
1950～1990年代	45.0%	47.5%	10.0%	12.5%	30.0%	20.0%	2.5%	40
2000年代～	63.0%	48.1%	11.1%	11.1%	25.9%	22.2%	0.0%	27
総計	54.1%	45.9%	11.0%	18.3%	29.4%	25.7%	0.9%	109

図 20 住居の閉鎖化に伴う循環

5. まとめ

過去の調査においては、玄関や窓の開放性が高く、玄関前の路地に植木鉢などの表出が置かれて領域化がなされて、それが見知らぬ通行人への排他性、近隣交際の契機となる融和性が築かれていた。一方、現在の路地空間では、建物の玄関は開き戸に変わり、窓の無い住居が増加することで、閉鎖的な住居形態となる経年変化がみられる。さらに、今回の分析結果から、既存住宅地における生活領域に関して得られた結果をまとめると以下のとおりとなる。

(1) 路地空間における表出は、玄関形式が引き戸で、窓が有る建物の開放性が高い場合や、建物へのメイン動線としての主出入口として利用されている場合に多くなる傾向にある。

(2) あふれ出しは、玄関形式が開き戸、窓が無い建物などの閉鎖的な建物や、建物へのサブ動線として利用されている場合に多い傾向にあり、表出とは逆の結果となる。

(3) 玄関前における表出が減少することで、道路の利用が低下しており、それにともない、近隣交際の希薄化が進み、さらに、表出・近隣交際に対する必要性も薄れている。

(4) 路地に面する住居の安心感について、集合住宅の形態と比べて低い結果となるが、これは周辺環境の変化、治安悪化による漠然とした全般的犯罪不安の増大が影響している。

(5) 近年、路地に対して玄関形式・窓が閉鎖的な住居が多くなっているものの、住居の開放性に関する意識について、最近の入居者では肯定的な評価が多く、否定的な評価は少ない。

以上のことから、本研究において、既存住宅地における住居の玄関形式・窓の閉鎖化が進むことにより、外部への意識の低下、表出の減少、近隣交際の希薄化、近隣交際意識の低下が明らかになった。今後さらに、居住者による木塀・ブロック塀の設置などの閉鎖化が進むことが懸念される(図 20)。しかし、地域における近隣関係は、教育、福祉、犯罪防止、住民同士の共助、災害時での減災の役割を果たした側面もある。そのため、この悪循環を断ち切るためには、まず、建築計画における住居の開放性を高めることで、好循環へと転換する必要があると考える次第である。

謝辞

本研究の調査にあたり、月島地区の自治会長、居住者の皆様にもご協力をいただきました。ここに記して深く感謝の意を表します。

参考文献

1) 藤谷英孝, 丁志映, 小林秀樹：都市型低層集合住宅における共有領域の経年変化 経年変化にともなう生活領域の変化に関する研究その 1, 日本建築学会計画系論文集, 第 672 号, pp. 283～289, 2012. 2
2) 藤谷英孝, 丁志映, 小林秀樹：高層集合住宅における共有領域の経年変化 経年変化にともなう生活領域の変化に関する研究その 2, 日本建築学会計画系論文集, 第 680 号, pp. 2313～2320, 2012. 10
3) 藤谷英孝, 羽鳥暁光, 丁志映, 小林秀樹：所有形態が異なる都市型低層集合住宅の経年変化 経年変化にともなう生活領域の変化に関する研究 その 3, 日本建築学会計画系論文集, 第 691 号, pp. 1883～1890, 2013. 9
4) 鈴木成文著：いえとまち 住居集合の論理, 鹿島出版会, 1984
5) 小林秀樹著：集住のなわばり学, 彰国社, 1992
6) 川口晋, 小林秀樹, 鈴木成文：住居の形態と共有領域 既存住宅地における共有領域研究 1, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1149～1150, 1984. 10
7) 小林秀樹, 川口晋, 鈴木成文：住居の形態と共有領域 既存住宅地における共有領域研究 2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 1151～1152, 1984. 10

8) 青木義次, 湯浅善晴：開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し 路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証 その 1, 日本建築学会計画系論文集報告集, 第 449 号, pp. 47～55, 1993. 7
9) 青木義次, 湯浅善晴, 大佛俊泰：あふれ出しの社会心理学的効果 路地空間へのあふれ出し調査からみた計画概念の仮説と検証 その 2, 日本建築学会計画系論文集, 第 457 号, pp. 125～132, 1994. 3
10) 金栄爽, 高橋鷹志：密集市街地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第 469 号, pp. 87～96, 1995. 3
11) 高木真人, 森田孝夫, 阪田弘一：京都東山における路地の空間特性と安心感からみたセキュリティ空間としての可能性, 日本建築学会計画系論文集, 第 652 号, pp. 1349～1354, 2010. 6
12) 小林秀樹, 鈴木成文：集合住宅における共有領域の形成に関する研究その 1 共有領域の構造, 日本建築学会論文報告集, 第 307 号, pp. 102～111, 1981. 9

注

注 1) 住居集合における生活領域の経年変化については、参考文献 1)～3)において、都市型低層集合住宅、高層集合住宅を対象に調査している。
注 2) 本研究では、調査対象地域である「既成市街地」を公共施設の整備、土地の高度利用等の市街地としての開発が既に行われて、現時点において家屋、商店・商店街が密集した地域、「既成住宅地」を既成市街地のなかでも、特に木造住宅などが密集する地域と捉えている。また、調査対象である「伝統的な住居集合」を集合住宅という均質的な環境や、近代以降の集住形式に対して、建築基準法が制定される以前の伝統的な住居を含む集合、「長屋」を伝統的な住居集合のうち、複数の住戸が水平方向に連なっている建物や、1 棟の建物を水平方向に区分して独立した住居とした建物、さらに「路地」を都市の下町に分布する長屋の間に設けられた通路で、居住者の生活空間として活用される空間と捉えている。なお、本研究における「経年変化」について、年月が経つことによる住居形態の変化を中心に分析している。具体的には、これまでの研究における管理組合、管理主体によって更新されている集合住宅とは異なり、それぞれの居住者によって増築・建替えなど、路地に面する各住居が様々な更新されている伝統的な住居集合を対象として、物的環境の経年変化を把握している。
注 3) アンケート調査における道路の利用頻度、道路での行為、集団の凝集性、日常的支配、安心感、開放性についての質問内容は、以下の通りである。

道路の利用頻度
玄関前の路地・道路にはどのくらいお出になりますか。単なる通過は回数に含めません。 イ. 日に何回も ロ. 日に 1 回程度 ハ. 週に 1、2 回 ニ. めったにない
道路での行為
お宅では、玄関前の路地・道路で下のような行為をどの程度おこないますか。 立ち話 小さい子どもの遊び 夕涼み・散歩 軽い運動 植木草花の手入れ 戸外の掃除 日なたぼっこ (イ. ほぼ毎日 ロ. 週 3～4 日程度 ハ. 週 1 回程度 ニ. ほとんどしない)
集団の凝集性（近隣交際）
あなたは、玄関前の路地・道路に面する近所の方のうち、どの程度顔見知りですか。 イ. 全員(家族を含めて)知っている ロ. だいたい知っている ハ. 半数くらい ニ. 2～3 軒くらい ホ. ほとんど知らない
日常的支配（排他感）
お宅の玄関前の路地・道路に他人がいる場合、どのように感じますか。 イ. 気にならない ロ. いい気持ちはしないが仕方がない ハ. 大変気になる
安心感
玄関扉を開け放しておくことがありますか。 イ. ほとんどない ロ. 時々ある ハ. よくある 開け放しておく事に不安を感じますか。 イ. 別に不安はない ロ. 不安を感じる
開放性
一般に道路に面して大きな窓がついているとした場合、どう思いますか。 イ. 開放的でよい ロ. 外の様子がわかってよい ハ. 道路で遊ぶ子供の監視ができてよい ニ. 道路にいる人と話ができてよい ホ. 家の中が見られるので気になる ヘ. 通風・採光以外の良さや悪さは別にない ト. その他

注 4) 高津充良：「既成市街地の路地空間-月島のケーススタディ」，東京大学卒業論文，1974 における路地の立面を表している。

注 5) アンケート調査では、個人住宅 125 件、アパートなどの集合住宅 7 件から回答を得たことから、個人住宅の回答が大部分を占めている。

表 道路種別と建物用途

	表通り	通り	路地	総計
個人住宅	9	12	104	125
集合住宅	2		5	7
総計	11	12	109	132

道路種別と入居年度について、通りでは「1900～1940 年代」の割合が多く、「2000 年代～」が少ない傾向にあり、表通りでは「1950～1990 年代」の割合が多い傾向にある。

表 道路種別と入居年度

	表通り	通り	路地	総計
1900～1940 年代	4	6	36	46
1950～1990 年代	5	3	34	42
2000 年代～	2	1	25	28
総計	11	10	95	116
1900～1940 年代	36.4%	60.0%	37.9%	39.7%
1950～1990 年代	45.5%	30.0%	35.8%	36.2%
2000 年代～	18.2%	10.0%	26.3%	24.1%
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

注 6) 表通り、通りを除いた路地の使われ方を集計したものが右上表となる。
これより、長期間住んでいる居住者では玄関前路地の維持管理、近隣交際の場として利用がなされているのに対して、最近の転入者では、これまでの路地の利用がなされていないことが確認できる。

表 路地での行為と入居年度

	1900～1940	1950～1990	2000 年代～	総計
有効回答数	31	33	22	86
掃除	1.74	1.78	1.13	1.59
植木草花の手入	1.84	1.47	0.70	1.40
立ち話	1.29	1.36	0.64	1.15

注 7) 参考文献 8) 9) の研究結果による。

注 8) 参考文献 12) の研究結果による。

注 9) アンケート調査において、路地に面する全住居の半数以上の回答を得た 11 本の路地を対象として、路地での行為内容と表出の関係を分析している。

注 10) <http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/toukei/johomap/johomap.htm>

注 11) 入居年数が少ない「2000 年代～」、最近の転入者における表出と近隣交際の関係を集計したものが下表になる。これをみると参考文献 12) の結果と同様に表出と近隣交際の関係性が確認できる。

表 表出と近隣交際（2000 年代～）

	全員	だいたい	半数	2～3 軒	知らない	総計
無し	0	5	3	5	2	15
有り	3	3	3	4	0	13
総計	3	8	6	9	2	28
無し	0.0%	33.3%	20.0%	33.3%	13.3%	100.0%
有り	23.1%	23.1%	23.1%	30.8%	0.0%	100.0%
総計	10.7%	28.6%	21.4%	32.1%	7.1%	100.0%

注 12) 都市型低層集合住宅の安心感としては、タウンハウス諏訪 38.5%、タウンハウス永山 39.4%、南桜井東急 38.3%、みつわ台 38.0%、南桜井ガーデン 28.0%である。高層集合住宅では、亀戸 2 丁目 47.7%、大島 4 丁目 22.5%、大島 6 丁目 34.2%、GM諏訪 13.2%となる。

TERRITORIALITY AND OPENNESS OF HOUSING SPACE IN ALLEY-SPACE

A study on long-term changes of territoriality Part 4

Hidetaka FUJITANI and Hideki KOBAYASHI***

* Part-time Lect., Graduate School of Engineering, Chiba Univ., Dr.Eng.

** Prof., Graduate School of Engineering, Chiba Univ., Dr.Eng.

Introduction

The changes of territoriality in low-rise and high-rise housings were revealed by the research so far. However, these subjects of research are apartment buildings, the territoriality in existing residential area in which there are many types of resident is not cleared. So this study subject is the existing residential area which is mixed by traditional dwellings and new type of housings.

Purpose of research

The purpose of this study is to examine relation between changed alley-space and psychology of dwellers. The boundary between inside and outside of dwellings in existing residential area is surveyed in particular. Furthermore, the relevance of territoriality and openness of housings space is cleared and good boundary of housings is presented.

Research method

First of all, the extensions of commodity and the self-expression elements of different entrance and window formats were grasped. Then the dwellers were surveyed regarding their daily lives by the questionnaire. The questionnaire items were the usage of alley-space, relationship with neighbors, sense of safety, and evaluation about openness and so on. Finally the relevance of the physical settings in alley-space and psychology of dwellers was analyzed.

Conclusions

The results are summarized as the following five points.

- (1) The self-expression elements in alley-space tend to be the most in the case of sliding door and window toward alley and in the main traffic line.
- (2) On the other hand the extensions of commodity tend to be the most in the case of hinged door and no window and in the sub traffic line.
- (3) The closer housings are toward alley, the less self-expression elements are. The less dwellers use the alley, the weaker neighbor relations become. Then necessities of neighbor community are lower as a result.
- (4) The sense of safety in existing residential area tends to be lower in comparison with low-rise and high-rise housings. This factor is deterioration of public order causes anxiety about opening entrance.
- (5) The residents moving recently evaluate affirmatively about openness of housing space.

The neighborhood relation was valuable in cooperation, education, welfare, crime prevention and so on. In addition, it was reduction of the effects of a natural disaster. Therefore, it is necessary to open housing in the architectural planning stage at first and it will be possible to create a virtuous circle.

(2016年4月21日原稿受理, 2016年10月19日採用決定)